資料

丹波國南桑田郡保津村五苗文書

井ケ田良治

保津川下りで有名な保津は、古くから筏下しでしられている。天正年間には筏下しについて秀吉から朱印狀をもらつており中世以來の名聲を誇つている。今ここでは筏の史料にはふれない。ここにあげた史料はいづれもこの保津の五苗の史料である。丹波に一般的に見られる數箇の同姓集團の保津におけるあらわれがこの五苗である。五苗は桂・村上・永井・長尾・石川の五姓からなる鄕士集團である。丹波の弓箭組、所謂弓者仲間に參加している鄕士格の家々は殆んどどの村にも散在しているが、南桑田でみると、山沿いの小村と龜岡盆地の大井川東岸にある大村（特に保津・河原尻・馬路）とでは村の構造が異なっている。そしてこの三つの大村は、若干の差異がありながら、鄕士集團に支配されている點で共通した性格をもつている。

保津村は南北兩村に分れ「寛延二年兩保津村委細帳」によれば、惣高二千六十八石二斗壹升惣家數三百七十六軒という大村であり、侍身分を稱する五苗は譜代の家賴を有し、家賴を含む「小百姓・下人」に對し種々の身分的規制を行つている。ここではこのような五苗の村支配の構造を示す史料を掲げた。

保津村の村落構造の檢討については、最近宗門改帳・名寄帳等を見る機會をえたので、別稿を準備している。

史料の閲覽を許された五苗の方々、特に桂吾一氏の御好意を謝すると共に、この史料が同學の方々の研究の素材に何分のプラスを加えうれば幸いと考える。

これらの史料はすべて人文科学研究所第三研究班の共同調査の所産である。

一

保津村北南兎割内檢定之事

一、從公儀御物成相定りゐハヽ、其米辻（マヽ）御檢地帳面ニ石ニ如何程とわり取可申事、

一、公儀ヨリ内檢御奉行被下ゐ共、其帳面にて算用相きわめ毛付高ニわけ取可申ゐ、

一、公儀ヨリなげ兎ニ被下ゐハヽ、内わニ而ハ北南ゟ貳人つヽ（書紙）せいしニ而奉行を遣し見立物成定可申ゐ、付リ、新川畝欠（出カ）ひらきの事、村きりニめん〳〵さはきニ而ゐ、双方かまい有間敷ゐ、仍如件

元和八年十月二日　　三　五　㊞

仁　兵　ヱ（花押）
茂　兵　ヱ（花押）
源右ヱ門（花押）
十　兵　ヱ（花押）
太　郎　介（花押）
兵　　介（花押）

南
惣中
まいる

二

今度山賣申代銀北南割分事、何程ニうれ申候共、北南高ニ半分わり取可申候、又半分ハ北南侍分家數書立、其家數ニわり取可申候、右之割ニ仕ゐ而北之取分内四百五拾目南へ越可申候、北南わりゐて、うちわニ而ハ家ニ半分、高ニ半分つゝわり取可申ゐ、右之分互ニ少も相違有間敷候、仍爲後日之狀如件、

寛永七年　　保津村
卯月十一日　喜左ヱ門（花押）惣兵ヱ（花押）
（以下畧）
（計四十一名連署）

三

（包紙）「北南山立毛賣申割」

山賣銀北南わりの究

一、拾貫目　孫左ヱ門殿三介殿へ賣分
一、拾貳貫目　松山賣分
都合　貳拾貳貫目

内わけ

拾壹貫目　家別
内五貫九百九十四匁　南分
同四貫九百四十壹匁　北分
殘　六拾五匁　あまり銀

拾壹貫目　高役
内五貫百八拾八匁九分　北分
同五貫八百三匁七分　南分
（殘カ）
〆七匁四分　あまり銀

取分合　拾壹貫七百九拾七匁七分　南分
一、四百目　北ゑ越分增
二、三拾六匁貳分　あまり銀預り
合　拾貳貫貳百三十三匁九分

取分合　拾貫百貳拾九匁九分　北分
内　四百目　南へ越引
〃九貫七百貳拾九匁九分
一、三拾六匁貳分　あまり銀預り
合　九貫七百六拾六匁壹分　定

寛永八年拾月吉日

五兵ヱ（花押）　たうねん
十兵ヱ（署押）　吉　藏
吉　丞（花押）　うなキ
藤兵ヱ（花押）　久三郎
長兵ヱ（花押）

南惣中
まいる

南保津
御侍中殿まいる

四

（ハシウラ）「山ノ證文ノ寫」

今度御山役米之儀ニ付者、我等四人として輿行仕、拾七人友達をかたらへ、神水を給、御代官岡田市兵衛殿へ目安を差上御理り申ゟ處、御在所御侍中を被召出、相方之様子被成御聞、下人共非分ニ被仰付、御代官殿ゟ我等ニ繩を懸、各〻へ被成御渡御せいはい被成ゟ處を、御出家衆中御侘言ニ付、今御ゆるし忝奉存ゟ、其上山へ入申事御おさへ被成迷惑仕ゟ而、重〻御出家衆へ御頼御侘言仕ゟへハ、山へ御入レ被成忝存ゟ、左様ニ御座ゟ而、御山役米儀者、其年之御見合いか程成共御さた次第ニ御納所可仕ゟ、依爲後日如件、

たうおう（マヽ）

寛永十三年六月六日　又

〃　又七

五

（包紙）「兩保津村下人百姓共ニ掟書」

南保津下人百姓共ニ掟の事

一、刀脇指さゝせ申間敷事、但供につれゟ時又者他所に使ニ遣し申時はさゝせ可申事、
一、からかささゝせ申間敷事（草履）
一、せきたつくりさうりはかせ申間敷ゟ、但足中つくりハ不苦ゟ、乍去侍衆ニあい申時者ぬかせ可申事、
一、侍衆の名を付させ申間敷事（名乗）
一、めん〳〵なのり（父母）を身共又ハをれなとゝいわせ申間敷事、
一、子共ニ親儀とゝかゝ（帽子）といわせ申間敷事、
一、侍衆ニあい申時ほうしとらせ可申事、
一、れうすな（漁）とりいたさせ申間敷事、
一、侍衆むかひ何にても慮外させ申間敷哀、
一、夜中に辻立小哥尺八しやうるり（浄瑠璃）いつれも左様のわざ可爲停止事、

一、侍の内へたゝ入慮外申ゟハ、打すてニ可仕事、
右之條〻於相背者、誰人乃下人なりとも互ニ見合次第ニはからひ可申ゟ、其時主人一言申間敷ゟ、仍爲後日證文如件、
寛永十三丙子歳

六

（包紙）「寛永年中之書
保津村下人小百姓共ニ掟書」

保津村下人小百姓掟書事
一、御公儀人に向ひ慮外仕間敷候、
一、刀脇指差申間敷候、
但供に連ゟ時又ハ他出申時ハ各別之事、
一、常に傘差申間鋪事、
但他所に出差申儀者是又各別之事、
附雪踏足駄（ハ）者き申間敷、且又夜中に辻立小哥尺八淨瑠璃いつれも左様之業可爲無用事、
一、侍分に逢申時、何にても頭にかふり物早速取之、辭宜可申、慮外之仕方於有之者、不可免事、
附侍分之名惣而己か名に右ヱ門・左ヱ門を付、子共に親祖父に様を付、女子共におノ字を付申間鋪事、
一、破風門構之儀ハ不及申、惣而花美之家作板縁疊之儀、堅ク停止、但愛宕法師者板縁疊免之、且又旅籠屋商賣之者疊ハ可用捨事、
一、鈴網引込四門手惣していし付之網（マヽ）取扱申間鋪事、
一、持高之儀居屋鋪一ケ所者もち可申事、
右之條〻堅可相守者也、
二月　日

七

一札之事

一、我等共講衆之中ニ五名之外御座ゟ、此度一座被成ゟ段、満足仕ゟ、以來講衆ニ組合同座仕間敷ゟ、爲後日之如此ゟ、
以上
寛文五年巳
三月十六日
講親　村上源右ヱ門㊞
同　村上勘左ヱ門（花押）
同　桂理兵ヱ（花押）
同　村上彌左ヱ門㊞
北惣中様
南惣中様
参

八

御伊勢宿にて座配之究事

一、五名之外者一座仕間敷事、向後五名之外を講衆ニ組合申間敷ゟ事、

右之通相究申上敷、互ニ何角と申間敷ゟ、爲其一冊如此ニゟ、

巳上、

庄や　長尾　九左ヱ門　㊞

村上　伊兵ヱ　㊞

村上　源右ヱ門　㊞

村上　長兵ヱ　㊞

寛文五年巳ノ三月十六日

南惣中様

北保津村惣中

参

九

定

一、在所に盗人有之ニ付村中互ニ迷惑仕ゟ間、向後ハ見付次第ニ、爲過料五人組ゟ壹人ニ米壹斗ツヽ急度取可申ゟ、付り暮六ッ打何にても作物取込ゟハヽ、見付次第に其荷物取過料同前之事、

一、在所下人不依日用等、食物之定、男ハ山に參ゟ共、里ニ居申ゟ共、夕食ハそうすい給させ可申ゟ、并女ハ兩度そうすい給させ可申ゟ事

一、遣下女出替り時分、奉公仕ゟ内ニ隱ゟて約束仕間敷事、若相背約束仕ゟハヽ所ヲはらい其季ハ在所ニ置申間敷事、

右之通互ニ定申上者違背申間敷者也、

寛文九年

酉ノ十月吉日　　新　兵　ヱ　㊞

（以下略）（計五十四名署名印）

一〇

南　村　之　定

一、山役米之儀、下人ハ勿論、不寄侍ニ、かり屋敷之者に未進出來申ゟハヽ、如先年之其屋敷主ゟ何程にても取立可申究也、村中相談之上ニ而、彌ゝ相究申上ハ、互ニ違亂有間敷者也、仍爲後日定置處如件、

延寶六年年十二月廿一日　　村上市左ヱ門（花押）

（以下略）（計二十九名署名印）

一一

定

一、龜山御城主松平伊賀守様御支配之御時、山殊之外あせ、殊ニ村近所之山崩多有之付而、谷川筋村中溝筋迄大雨之時分夥敷砂出田畠損迷惑申ゟ故、五名之者共相談之上ニ而、内山致割符ゟハヽ、ずりあれ有之所茂互取打之衆中林シ可被申ゟ、然上者連ゝ砂をも出申間敷ゟ、其上相應之山役付ケ置ゟハヽ、小百姓等之ゆるミニも罷成、迚もあれ山之義ニ

ゐへ者、せばミニも成不申ゐ、然上者御公儀様御爲旁以之義ニ付而、右之段〻御訴詔申上ゐへハ、被爲聞召屆、五名願之通被爲仰付被下ゐニ付、何茂相談ニ而村ニ住居いたしゐ衆中ニ致割符ゐニ付而、後〻末代迄定置證文之事、

一、此度番付をいたし壹人ニ三反宛割、境目帳面ニ仕立致圖取埒明申上者、互違亂申間敷事、

一、別家を作り隱居致ゐ衆、二男引取其家を持よめをも取申ゐハゝ、割符之通幾人ニ而も相渡可申ゐ、雖爲別家よめ取不申ゐ者、山渡申間敷事、

一、加様ニ帳面作り境究置申上、何角與境論被致、相對ニ而埒明不申ゐ者、五名之評議請可申ゐ、若評議相背同心無之ゐ者、破り申仁ゟ鳥目壹貫文出させ置、神主を頼、是非之神符を上埒明可申ゐ、然上者破り申仁理之符上り申ゐ共、壹貫文之儀ハ出させ可申事、

一、山之立毛永代他郷へうり申間敷ゐ、縱村へ賣ゐ共、他郷之薪かり山へ入申間敷ゐ、召連之者ハ各別、若他郷之山人入、薪かり申ゐを見付ゐ者、山主ゟ過錢として錢壹貫文取、其上五人組中ゟ壹貫文之過錢急度取可申ゐ、付タリ、互ニ山廣せばミ申分仕間敷ゐ事、

一、山永代賣買仕間敷ゐ、立毛賣買之義者、年季三ケ年切より外ハ仕間敷ゐ、縱雖爲三ケ年内、主ニ續賣買仕間敷ゐ、若相背申仁知ル(マヽ)申ゐ者、是茂五人組ゟ過錢右同前之事、付タリ、しち物ニ入ゐハゝ、五人組加判無之賣買致間敷事、

一、自身山役之衆、割符山有之ゐとて、山役上申義致させ申間敷ゐ、其外召遣何人有之ゐ共、御奉公人者各別、耕作いたし申ゐ上者、山あけ申間敷ゐ、自身山之衆曾而山へ入不申ゐ共、其仁相應之山役かけ可申事、

一、南山牛飼場之義、中尾栗原岩尾のもと伏石ゟ西上者、人々境有、又茶屋之段くちはめかゑニ伏石有之、

一、北山大久保おくのくぼ横ゆりに伏石有之、此外東谷ハ人〻かまちニ而、牛飼場何間除と帳面ニ有之、若帳面之外林シ出し牛飼場之せばミニ成ゐ者、村中立合帳面之通かり取可申ゐ、牛飼場境ニ山持申上者、牛馬わり山へ入ゐ共、互勘忍可致事、

一、右わけ山へ入、盗かり取申を見付ゐ者、爲過料藏米壹斗五升急度取可申ゐ、此内壹斗ハ詔人(証カ)、貳升者山主、三升ハ村へ取可申ゐ、か様ニ相究申上者、雖爲何者互依怙贔屓仕間敷事、

一、わけ山之内ニ古來ゟ在來ゐ雖爲細道、互ふさき申間敷ゐ、幷あまこひゟ山坊へ之水貫、誰人之山たりといふ共、茶屋大ずへ貳所へ落可申事、

一、山役壹わりニ付御藏米貳升宛、

一、今度割符之失却(マヽ)壹わりニ付三匁三厘宛出し申ゐ、

向後ハ割符取衆出來ゐ者、右之銀請取可申ゐ、又妻子を茂引越他國致ゐ仁於有之者、三匁三厘之銀村ゟ相渡可申ゐ、

延寶九辛酉年四月十九日

庄屋　村上清太夫
庄屋　村上市左ヱ門
肝煎　村上勘左ヱ門
肝煎　村上善右ヱ門
年寄　惣中

両村ニ一冊宛とりかわし置所如件
紙數貳拾九枚
但白紙上紙共

一二

帳替之定（写）

一、買主賣主共ニ在所ニ居申ゟハヽ、賣主ゟ貳拾文、買主ゟ三拾文出ス、他所ニ居申仁之田地在所ニ居申仁買ゟハヽ、買主ゟ百文ツヽ取可申ゟ、北ニ居被申ゟ茂他所同前、

譲り田地譯ハ何方ニ居申ゟ共、三拾貳拾文ツ、（マヽ）出シ申筈、

元祿三年十二月十二日

「右在所中寄合相極申ゟ」…（但これは本紙に記しあり）

明和四亥十二月十日寫之

一三

定

一、先年両村相談之上にて相究申ゟ、下人ニ田畑買を申間敷ゟ同百姓之賣買ハ閣別之事、

一、畑屋敷望申ゟハヽ、是ハ如何程ニ而も望次第ニ賣可申ゟ、

一、田地賣ゟ處ニ、侍分之内ニ買手無之百姓分ニ買手ゟハヽ、直段之義偽無之侍中ニ致披露遂詮義、其上ニて差圖次第ニ賣可申ゟ、

一、田畑川成賣買之義ハ、帳面吟味之上ニ而庄屋肝煎判形無之賣買仕間敷ゟ、

一、惣而田地賣買之義、庄屋加判無之賣買仕間敷ゟ、自今以後庄屋衆加判無之ゟハヽ帳替仕間敷ゟ、

右之通相談之上ニ而究申ゟ、若違背令申ゟハヽ、侍中之一座仕間敷ゟ、以上、

元祿四年未二月十日

庄屋
□㊞　□㊞　□㊞
……（以下欠）……

一四

誓紙前書之事

一、庄や仕候上ハ、諸事在所出入、其外何ニ而茂ゑこひいきの沙汰仕間敷事、

一、御藏ニ而めこぼれ米、御公儀へ御取被成ゟ外ハ在所へ勘定可申ゟ事、

一、諸奉行賄之事、入用次第仕出シ可申ゟ、但御奉行用ニ調申ゟもの少ゝ餘り申ゟ分ハ不苦ゟ由、在所衆ゟ被仰渡ゟ事、

右之三ケ條於相背者、別而ハ請田大明神八幡大菩薩、惣而ハ日本國大小之神祇可蒙御罰者也、仍誓紙如件、

于時　元祿八乙亥年十一月三日　　桂　彦六　　閑　齊
南保津惣中　　助十郎　佐之介
　　庄　助
　　三　介

一五

一　札之事

一、私共儀者、石川加左ヱ門殿御先祖代々ゟ私共先祖代々譜代相傳之御家賴ニ紛無御座ゟ所ニ、此度譜代ヲ放レ可申企ヲ仕、御村之式法ヲ相背キ申ニ付、御立服被遊、御公儀様ゟ被仰上ゟ所ニ、從御公儀様爲過怠角兵ヘニハ手錠被仰付、殘五人之者共ニ御預ケ被成、難儀迷惑ニ指詰り、兩村御出家中ヲ賴上、様々御詫言申上ゟ所ニ、村之御慈悲ヲ以、御內證御赦免被遊、御公儀様へ御詫言被成被下、難有奉存ゟ御事、

一、加左ヱ門殿御家賴ニ紛無御座ゟ上ハ、加左ヱ門殿家筋御代々私共子々孫々迄、何分ニも無異儀御奉公相勤可申ゟ、被仰付ゟ品少茂相背申間敷御事、

一、御村之式法被仰付儀毛頭相背キ申間敷御事、

右之通請合申上御詫言仕ゟ上者、及違背慮外成儀御座ゟハヽ、御公儀様へ被仰上、如何様ニも曲事ニ可被仰付ゟ、其時一言之御恨申上間敷ゟ、仍而爲後日如此ニ御座ゟ、已上、

元祿拾丁丑二月日　　角　兵　ヱ
　　石川加左ヱ門様
　　兩村御侍中　様

右之本紙者、石川加左ヱ門様へ相渡し申ゟ留書如此ニゟ、

以上

一六

一　札

私儀者、先祖當村ニ八人ニ而御座ゟニ付、五名之御衆中神明講ニ者御入不被成ゟ得共、此度兩村侍中ニ御願申ゟ處ニ、講衆ニ御入被成被下ゟ、然共伊勢講之節者、末座ニ座席可仕ゟ、尤參宮之節、太夫殿ニ而者末座ニ茂席不仕、別間ニ居可申ゟ、勿論何事茂御指圖背申間鋪ゟ、爲後日一札如件、

寶永五年子二月十一日　　勘　物　㊞
　　嘉　兵　衛　㊞
兩村侍中

一七

一　札

久助儀、今度主人五郎助方ニ不屆之義有之、居屋敷を立退申様ニと被申付、其上御村方へ茂我まゝ成儀を申上ゟニ付、私共へ

御預ケ被成ゟ處、御詫茂不申上、法外之仕方仕ゟ間、今度御吟味之上急度被仰付、迷惑至極ニ奉存ゟ、段々御詫申上ゟ得者、被遊御聞届御赦免被成被下難有奉存ゟ、然上者、向後諸事相嗜、御村之御作法等急度相守由可申ゟ、爲後日一札仕差上申ゟ、

以上

享保二十年
卯三月日

久　助㊞
左　五　助㊞
孫　太　郎㊞
孫　兵　ヱ㊞
孫　　助㊞

御年寄中様

一八

起請文之事

一、評議之儀者、公用村用等萬端大切之儀ニゟ得者、古來之通諸事格式相守、或親子兄弟等ニ而茂不致依怙、急度相正、假令同席ニ雖有故障、無憚理非を論じ、忘我意事、不可致延慮事、

一、評議之儀者、大切之儀ニゟ而村中之鏡ニ而ゟ間、平姓之物語ニ不致勿論、少之品茂不可致他言事、

一、内檢見之儀、古來之通立會見分之上、少茂致依怙間敷ゟ事、

右評定之儀、理非決談之上、面々所存之旨申明メ、不存我意、只道理之所押、或爲人之方人、乍知道理之旨構申無理之由、排據之儀を不申、諸事相定、新規之儀者、尙以念を入可相定者也、令違者、梵天帝釋四大天王、惣而日本六十餘州之大小之神祇、天照大神宮、春日大明神、八幡大菩薩、熊野大權現、當地請田大明神神祇明祇可罷蒙者也、仍起請文如件、

于時享保貳拾乙卯年九月七日

村上又四郎
桂　忠次郎
桂　吉之丞
桂　甚兵ヱ
村　上半物
桂　重郎兵ヱ
村上　五右ヱ門
村上　治右ヱ門

（料帋　牛王寶印）

一九

起請

一、當村諸法度并評儀等に至る迄、依怙致さす勘定等正直に可致事、

一、内見之儀たとひ他村ニ罷有ゟ者等迄、依怙不致、隨分不同無之様ニ可致事、

一、此神文にもれゟ面々ハ萬端可有遠慮ゟ、萬一我意有之ゟハヽ、各一同ニ御祇可蒙ゟ條、仍如件、

元文元年辰　九月廿六日

村上又四郎
桂甚兵ヱ
桂太助
村上五右ヱ門
桂三左ヱ門
桂忠治郎

（料帋　牛王寶印）

二〇

定

一、田畑賣買之儀、前〻通小百姓に賣渡ゟ事堅致間敷ゟ、尤居屋敷壹ケ所ハ格別之事、
一、小百姓講田之義ハ、兩村相談之上ニ而如何様とも可致事、
一、小百姓講田猥ニ外に賣ゟ儀、致させ間敷事、
右之通、前〻ゟ村古法有之ゟ得共、此度兩村立會相改メ申ゟ、若了簡違ニ而賣渡申事有之ゟハゝ、其後五名參會致間敷ゟ、承知之上銘〻連判如件、

延享三丙寅年正月　　桂茂左ヱ門㊞

（以下略、計四十八名連署印）

二一

覺書

當村其御地御領分北保津村百姓之內、小林黨之者共之儀、往古者鎌倉方ニ仕官ノ武士ニ而、從五位下三浦駿河守義村次男小林太郎忠重、後ニ號式部、寶治元年ヨリ丹波國保津之領主タリ、右小林式部忠重ヨリ四代目至リ、小林左近將監時守に丹波國保津ノ地頭タリ、於鎌倉北條家相模入道死後、元弘三年六月古郷保津に歸、扇打敷被致自害之人者、則小林左近將監時守ト申候、皮ノ跡を于今扇の芝と申傳ゟよし、右之地乍少分も其由緒を以、檢地に相成、則墓所ニ而ゟよし、古來ゟ相立御座ゟ塚印誠ニ雨露にくちはて申ゟゆへ、小林ノ末流相なけき罷有ゟ所ニ、元久年に京都西賀茂靈源寺ノ住持德宗和尚、右小林之由緒ノ僧ゆへ、小林左近將監時守之塚印を修覆有之しよし、其時則彼村福住寺右之供養も被相勤ゟ旨に御座ゟ、左様之由緒御座ゟ小林之者共を去〻夘ノ年二月、小林黨之支配致來りゟ大年財辨天ノ社ニ附申ゟ森ノ樫ノ大木、前ノ庄屋勝右ヱ門先城主青山因幡守殿郷中役人中を申合きりゟ所、小林之者共みとがめ置申ゟ義ゆへ、于今其所に切り申ゟまゝニ指置ゟ事、右支配ノ小林へ相談も無之ゟ義者、則第一大ノ公妄にて、夫より色〳〵と先役人中と庄屋共一所ニ相成り、小林を打こほち申ゟ義ニゟ、去年十月比ニ左近將監時守ノ塚印を打こほち、庄や勝右ヱ門方へかくし置ゟよし、小林之者共由緒ヲ申立ゟ義を、甚以庄や共きらい申ゟよし、去々年より先城主御所替之御沙汰御座ゟより、彌（難澁）さいわいと存ゟて、ケ様成なんしうの義、當御城主ハ御難かけ置申ゟ義者、畢竟庄屋役人共小林を幸にこほち仕舞度存念、甚以不屆千萬成義ニ被存ゟ、兎角此願筋ハ大主明君之正法を以、すみやかに小林諸願成就仕ゟ様ニ御勘辨御座ゟ様御賴申入

度あらましめ是ニ御座ゐ、以上、

午ノ年

正　月

［付］

右覺書ハ小林之者共九條殿諸大夫石井河内守を賄路を以相馮ミ、河内守ゟ松平紀伊守殿御代官完倉瀬左ヱ門田淵吉大夫御兩人へ此書付差越、尙又書狀ニ而も相馮ゐへとも、先青山御代及出入御裁許相濟ゐ事故、御構無之、其後河内守ゟ使者を以相馮當御□御代官兩人龜山旅籠町宿屋宅ニ而、使者へ對面有り、先御城主裁許相濟ゐ事、當代ニ取上不申段、御返答相濟、河内守茂力なく其後ハ馮狀も不差越由ニゐ、

寛延三年年正月

二二

口　上　覺

一、古來ゟ村作法之儀惣方へ被仰渡、遂一御尤奉存ゐ、侍方者不及申、小百姓共迄、身持不埒仕ゐもの於有之者、家之儀隨分吟味ニ□合可申所□ゐ、古來村定之通り、小百姓共可相守樣ニ、吟味之役拙者ニ被仰付被下置ゐ、隨分下方迄右之通りニ爲致義奉存ゐ、已上

記　錄

一、九月廿四日夜　請田大明神樣御向ニ參りゐ節、灯燈三帳請取御供可仕事、

一、火之用心之事、

一、ばくゑき乃事、

一、兩村男女若衆小宿入停止之事、

一、小百姓上方ニ慮外仕間敷事、

一、かや之刈干柴荷出之事、

一、はいすこかや（マヽ）□こゑ他所ニ不出事、

一、野嶋道作之事、

一、百姓□之者上方樣夜遊致間敷事、

一、大晦日之夜、愛宕社參之旅人、村方ニ而さふ宮致間敷事、

一、宿屋ニ而旅人留之儀、一夜ニかきるへき事、

一、正月十四日之夜北南さふ宮申間敷事、

一、大川すぢへ地所（他カ）ゟ入込ゐ役、村法之通りせいとう之事、

一、奥筋之馬くわへきせるよこのり致さる間敷事、

一、谷川筋ニ而亂ニ石取申間敷ゐ事、

一、北南山内持山吟味之事、

右之條々急度可申付ゐ、か樣之儀改付ゐ儀、拙者村方之御せわニ罷成ゐ間、爲はたらきの相勤申度ゐ、何分いか樣ニ□あひやうき上可然樣ニ□ゐ已上、

寛延三年年　十二月　日　長尾勘平㊞　北保津村

二三

（包紙）「法度書　一通」

定

一、御上納銀并祠堂銀等、村方に無相談借用致シ申間敷ゐ、萬一村方へ無斷内々ニ而借請ゐ儀も有之ゐハヽ、親類中ゟ急度相立、如何様之儀出來ゐとも、村方に小茂御世話掛ケ申間敷事、

一、他所ニ而何事ニ不寄公邊掛り之もくろミ書等、村方に無相談いたし申間敷事、

右之通急度相守可申ゐ、若相背キ申ゐハヽ、五名之參會相除可申ゐ、以上、

寶暦六丙子年十月

桂孫市郎㊞　（以下畧、計四十四名連署印）

二四

（包紙）「地藏堂山證文　念佛講中　世話番共」

差上申證文之事

一、近年講中及困窮、惣堂修覆并ニ疊表替等之繁錢（マヽ）ニ難澁仕ゐニ付、何卒御分ケ山上リ山之内ニ而も壹ケ所御附被下ゐ様御願申上ゐ處、御聞屈被成下、御分ケ山之内ニ而御寄附被下、以御願修覆并ニ涅槃會等賑敷相勤可申ゐ與難有奉存ゐ、尤堺目之義ハ南木下タレ（マヽ）北ハ小谷限御印之通奉畏ゐ、後々ニ而も不筋之者御座ゐハヽ、御寄附山御取戻し可被下ゐ、尚亦前々ゟ御分ケ山之義者、嚴敷被仰付奉畏被有ゐ處別而以後之義ハ、人々供吟味仕、下草ニ而も刈取ゐ者御座ゐハヽ、早速可申出段被仰渡ゐ、奉畏ゐ、右躰不埒之者共ハ、御差圖之上、私共講中ゟも講席相除可申ゐ、爲後日之御請證文奉差上ゐ、以上、

安永六年　　喜助㊞
酉正月　　彦三郎㊞
　　惣八㊞
　　左五七㊞
　　藤次郎㊞
　　市助㊞
　　善九郎㊞
　　加兵ヱ㊞
　　安兵ヱ㊞

御庄屋
桂與惣兵ヱ様
村上源右ヱ門様
御會所御衆中

二五

（包紙）「定書一通」

定

一、侍分所持之網、譜代之家來たりとも一切かし申間敷ゐ、尤召仕之家來ニ遣セ申ハヽ、主人相添罷出可申ゐ、

一、他村之者、川狩ニ相伴ゐとも、網者一切かし遣セ申間敷ゐ、勿論網持參いたしゐとも同斷之事、

右前々之通、此度兩村立會相改申ゐ、以上

宝暦九年卯六月廿六日

二六

（表紙）「御他領奉公人無用段申付ゟ處、下人共承知
仕ゟ付、承知印判取之ゟ帳面」

覺

一、下人小百姓共一同仕、我儘ニ他所之奉公仕段申出ゟニ付、御領分ハ差免シゟ、乍併御他領ハ愈嚴敷指留メ申ゟニ、折節御上ゟ茂御吟味有之ゟ故、御他領嚴敷無用之段申付ゟ處皆〻承知仕ゟ故、爲後日之一札取之ゟ、以上、

天明元年
丑十月　　庄屋　村上久助㊞
　　桂太（ママ）助㊞
　　桂壹治㊞

一札之事

一、御他領ニ奉公仕ゟ義ハ、前〻ゟ御法度之御義、別而此度嚴敷御吟味被遊ゟ所ニ、私共組下ニ他領奉公仕ゟもの壹人も無御座ゟ、向後御他領ニ奉公仕ゟ者自然有之ゟハヽ、如何樣共御咎メ可被成ゟ、爲後日之證文連印、依而如件、

五人組頭
庄次郎㊞
（以下畧、計四十名連署印）

天明元年

丑十月
御會所

二七

（包紙）
「十四寅二月
乍恐奉指上ゟ返答書　南保津村　北保津村　小百姓一統　惣代」

乍恐就御尋口上書
南北保津村
小百姓一統

長百姓中ゟ私共相手取御願被申上ゟ返答書、當月八日ニ奉指上ゟ處、田地之義者相分りゟ得共、先達而私共ゟ村役人ゟ申出ゟ願四ケ條之趣、難相分ゟ間、委細ニ書上可申樣被仰付、左ニ奉申上ゟ

一、私共居屋敷地借り地之もの數多御座ゟ處、前〻ゟハ年貢餘慶ニ相成及難儀ゟニ付、前〻之通相成ゟ樣仕度ゟ事、

一、手弱キ小百姓幷ニ牛無之ものニハ、長百姓ゟ田地宛不被申ゟ而難澁ニ付、他所之田地作り罷在ゟ處、被差留渡世出來兼及難儀ゟ間、長百姓中ゟ多少かさらす渡世相勤り可申程ハ宛作申請度ゟ事、

一、私共仲間內、勝手ニ付、他村ニ奉公相勤居ゟ男女被呼歸、村方ニ而下直ニ給銀相定有之定り之給銀ニ而被召遣ゟ、夫

〻奉公相勤申ゟ身分之もの、年被寄ゟ而渡世も暮し兼ゟ、親共爲助力杯と二而奉公仕ゟもの共、甚及難義ゟ二付、他村二而も御同領地へハ差罷ひ無之ゟ樣勿論、村方二而者召遣ゟハゝ、時節相應之給銀被相渡ゟ樣仕度ゟ事、

一、傘雪駄之義、當時專村法と申之、私共一向被差留ゟ得共、全躰以前ハ左樣之義無御座、尤同シ小百姓之內二も家來筋之ものハ長百姓と行合等之砌斗、右傘雪駄等も遠慮仕ゟ義二御座ゟ得共、小百姓一統平生法度二而ハ無御座ゟ、然レ共小百姓之事故、傘雪駄等相用ゟ義、平生二入用無御座ゟ故、自然と長百姓中法度二被相心得、折二寄右傘雪駄等相用ゟ節ハ其相咎メ被申、每度難義仕ゟ二付、右傘雪駄相用ゟ而も不苦ゟ樣仕度ゟ、尤貧窮之小百姓共故、法度無之ゟ而も、平生餘慶相用ゟ義二も無御座ゟ事、

右吟味二付申上ゟ四ケ條之趣、少も相違不申上ゟ、

一、長百姓中ゟ被申立ゟ、當村百姓共義、元來長百姓共之家來之もの故、外〻村方と違ひ小百姓共二高下無御座、皆同樣之もの二而、門破風等ハ不及申板椽疊等も不仕、何事も家來之身分二應し、平生長百姓二對しゟ而ハ、互二主從あしらい仕來ゟ、村方古來ゟ之村法二而御座ゟ由被申之ゟ、

此義先達而も返答書二申上ゟ通、私共小百姓仲間一統家來二而ハ無之、少〻斗御座ゟ、例年宗旨御改之節、家來筋之ものハ、則主人之印形ヲ以、自分之印形用ひ不用分ハ、家來二相違無御座ゟ、依之板椽疊雪駄傘足駄等相用不申ゟ、古來ゟ之村法二而も無御座ゟ、尤門破風ハ村法度二而、小百姓等相成不申趣承知仕ゟ、前段二も申上置ゟ通、何分小百姓之義故、困窮之者多御座ゟ故、法度二無之ゟ而も、右躰之品〻自然與得相用不申罷在ゟ義二御座ゟ、右二付一統長百姓二對し主從あしらいハ不仕ゟへ共、隨分長百姓中二對しゟ而ハ、何事も重シ罷在ゟ處、主從あしらい之樣二心得違被申上ゟ段、甚迷惑二奉存ゟ御事、

一、近來長百姓共相衰ゟ二付、小百姓共募り上、主從之禮義も存不申樣二罷成ゟ、然ル處此度ハ小百姓之內若キ者、古法之村法を相破り、雪駄をはき往來仕ゟヲ、長百姓共見咎メ申ゟ、依之小百姓之者共大勢徒黨仕、新法成義を企、古法を打破り可申工ミを仕ゟ樣、長百姓ゟ被申立ゟ、

（以下欠）

一、長百姓中當村之奉公人無數ゟ節ハ、他所ゟ奉公人被抱ゟ處、右他所之もの參り有附ゟへハ、山抔と二而口論私共仕懸ケ、自然と他所ゟ奉公人不來ゟ樣、私共相工ミゟ旨被申上ゟ得共、私共砌左樣工ミ無御座、何方より奉公人被召抱ゟ而も、少も構二相成不申故、乍恐此趣長百姓へ被仰聞被下ゟ樣奉願上ゟ、以上、

天明二年寅二月　　南保津村惣代　安　兵　エ　㊞

（以下畧計九名連署印）

北保津村惣代
源　七㊞
（以下畧計六名連署印）

中村彌助殿

二八

乍恐奉指上ゟ返答書

南保津村　小百姓一統
北保津村　小百姓一統

一、去ル丑六月日、七月、當正月、三ケ度ニ南北長百姓一統ゟ私共相手取御訴訟被申上ゟニ付、被召出奉驚入ゟ、依之早速長百姓ゟ願書之趣返答差上可申様被爲仰付ゟニ付、仲間之もの打寄追〻相談仕罷在ゟ得共、何分愚安之小百姓斗之儀故、何事によらす御上様ゟ書上ゟ儀ハ甚恐入、口上を以申上罷在ゟ仕合ニ御座ゟ、然ル處當正月、猶又長百姓中ゟ追訴被差上、御田地當替之義私共所存も御座ゟ様被申立、至而込り入申ゟ仕合ニ御座ゟ、全躰私共儀ハ小百姓之儀ニ付、何連長百姓中ゟ御田地當テ作仕渡世相續仕ゟもの共故、御田地差戻し申度心底少も無御座ゟ得共、不作斗ニ罷成ゟ御田地ハ、毎年宛替之節、斷申差戻し、又〻外之御田地宜敷場所を請ゟ歟、或ハ思敷御田地無御座ゟ節ハ、山稼成共渡世仕ゟ義ニ御座ゟ、然ル處當正月御田地宛替之節も、昨年作德無御座渡世ニ相成不申御田地之分、銘〻三反五反ツゝ例年之通差戻し申ゟ處、然らハ外ニ何連之田地宛作差出しゟ共不申、何之子細無御座、請取被申ゟ故、當年之儀ハ山稼成共可仕與存知罷在ゟ仕合ニ御座ゟ而、私共ニハ何之工も無之、有躰右之仕合ニ御座ゟ處、却而工も御座ゟ様ニ長百姓中より被申上、迷惑至極ニ奉存ゟ、且又御田地相續之儀ハ、私共何れ渡世ニ抱りゟ様勘定ニ合申ゟ分ハ、一切差戻しゟ了簡無御座、下作渡世之事故、何れ少〻長百姓中ゟ了簡を以當テ作德式ニ而も引下ケ被呉ゟハゝ、猶以大切ニ存、渡世仕ゟ御儀ニ御座ゟ、

一、當村小百姓共之儀ハ、元來長百姓之家來之ものニ而、一同長百姓ゟ對しゟ而ハ主從あしらい仕來り之趣、村方古法之旨、被申上ゟ得共、私共小百姓一統家來之者斗ニ而ハ無御座、何様家數南北ニ而凡三百餘小百姓之内ニ、少〻家來之もの御座ゟ而、其外ハ家來ニ而ハ無御座ゟ、尤右家來筋之ものたり共、三代五代以前奉公仕、當時ニ而ハ疎遠ニ罷成ゟものも御座ゟ處、当村長百姓中ニ限リ、一統當時召遣ひゟ奉公人同様之取斗、何事も威光ケ間敷被致ゟ段、折ニ寄ゟ而ハ渡世之差支ニ相成、至而迷惑仕ゟ義ニ御座ゟ、別而昨年ゟハ爲差事ニ而も無之、聊之無禮等之筋合を村法相背ゟ抔と度〻御訴訟被申上ゟ段、近頃迷惑至極ニ奉存ゟ、ケ様之事共、何連聊之儀渡世之頓着ニ抱り不申、且又長百姓中ゟ之申立故、私共如何様ニも不苦ゟへ共、元來長百姓小百姓も、一同同様ニ百姓ニゟへハ、爲差事ニ無御座ゟハゝ、長

百姓中ゟも餘り威光ケ間敷不申、同樣百姓之事故、道ニ而行合等之節も、何事ニよらす大目ニ致被呉ゟへハ、自然與小百姓共氣ふく仕、結局詞ニしたがいゟ樣ニ相成、御田地も猶以大切ニ相續仕、雙方一統ニ相納りゟ義ニ御座ゟ間、御慈悲を以、此趣長百姓中相心得被呉ゟ樣、被仰付被下ゟハヽ難有仕合可奉存ゟ、勿論長百姓ゟ對し、ケ樣之返答申兼、是迄差扣居ゟへ共、御上意ヲ以返答差上ゟ樣被仰付、且又私共百姓渡世之差障りニも相成ゟ義故、無是悲各〻仕合ニ御座ゟ間、乍恐右之趣被爲聞召分呉ゟ、長百姓中餘り威光ケ間敷儀無御座ゟ樣相成ゟハヽ、廣太之御憐愍と難有仕合可奉存知ゟ、已上、

天明二年寅二月　　南保津村

小百姓一統

惣代　安兵ヱ㊞
同　市助㊞
同　與兵ヱ㊞

北保津村

小百姓一統

惣代　源七㊞
同　庄三郎㊞

中村彌助殿

保津之諸士五苗姓氏由緒之記錄者、和光院寶藏有之、長尾十郎助景宜撰之、且傳ニ五苗一統元祿之頃迄ハ帶刀仕來ト云〻、其後中絶、然レとも譯合申立、相殘帶刀人も有之、亦繼目屆等も無之哉、取失ふ輩も有之、亦時ニ叶ヒ免許帶刀之輩茂有之、

二九　五苗一統苗字帶刀之記錄

寛政六年寅五月、御領主御勝手向御手操、右ニ付先納御用銀被爲仰付、依而北組ニ而者篠村栗山善右ヱ門・村上與惣兵ヱ・桂吉之丞（後ニ替ル）・國分茂兵ヱ・美濃田儀左ヱ門・形部直右ヱ門（後ニ勝林島五平次も入ル）、西組中筋等ハ略之、是等を右世話役與被爲仰付、村〻一統慥ニ存、御代官亦ハ町方ニ而掛ケ屋御定メ、則俣野久左ヱ門樣ゟ追〻相納罷有ゟ處、去申年ノ冬、三組世話方茶屋敷萬屋宇右ヱ門宅ニ而會合シ相談之上、先納銀之通御用出銀之通分有之ゟ、先納銀之通り名目改ゟ得者、自然之時大夫ニ可有之哉、年數も重りゟ故、左も無之してハ最早危相見ゟ申ニ付、名目書替相願可然、相談一決ニ付、北組時之代官寺本六郎兵ヱ樣へ申出ゟ處、早速御受御窺ゟ上ニ而先納銀之通御改被成下ゟ、然ル所ニ、當酉九月御領分一同銀主共被爲召出被爲仰渡ゟハ、御他領銀主ゟハ七ケ年御差引御斷被仰渡ゟ、御領分銀主ゟハ五ケ年延引之段被仰渡ゟ、其後同月先納世話役人并ニ村〻庄屋共被召出、御館ニて御家老衆中御例座（列カ）ニ而、國府五兵ヱ殿御發言ゟて、先年代官共より申渡ゟ義も有之ゟ得者、御不本意ニ者被思召ゟ得共、御上ニも當時至而御不手操ニ付、惣而銀主ゟ

（表紙）「五苗一統苗字帶刀之記錄」

御斷有之、尙亦先納銀之義も九朱之利下ケ元銀ハ置居と被仰出ゟ、其旨承知可仕段、急度被仰渡ゟ、則御館ニて町宿ニて支度申付置ゟ間、其旨承知可有之段被爲仰付ゟ、一同奉畏ゟ、尙又世話役之分ハ御勘定所ゟ可罷越處、是又被仰付ゟ、則御勘定所ニて例年之通御目錄頂戴仕、夫より本陣桂善右ヱ門へ郡中世話役村〻庄屋中一同罷越、御膳御酒等被下置ゟ、尤御代官幷ニ手代衆段〻御上御不手操必至御難澁之段被仰入ゟ、然れとも郡中一同近年困窮手詰り罷居ゟ上、差留り名〻所〻銀主共ゟ例年是迄入御下ケ被下ゟ銀札持參いたし、亦借用之上差上來りゟ處、當年御差引不被下ゟ而仕方無御座、甚以難澁仕ゟ段相歎ゟも多ク、亦惡口申者も有之ゟ、其後又茶屋敷萬屋宇右ヱ門ニ而、三組世話方村〻庄屋寄會ニ而願書差上ゟ得共、御聞屆ケ無之、依之亦本町竹やニて三組世話方寄會、其席ゟ古世村井瓦源三郎も參ル段ニ强き呼定之上、强追訴之願書差出ゟ所、三組世話方共御勘定所ゟ被召出、段〻差上ゟ願書之趣尤ニも被思召ゟ得共、被仰渡ゟ通之義取斗方も無之、依之當霜月十五日ニハ融通講三會目餘銀四拾貳貫目、且又思召有之御前直し被爲仰出ゟ置ゟ御用米、年分ニ四百石ツヽ例年御除置臨□御用之御手當ニ可仕樣被爲仰付ゟ御用米、昨年始て四百石御除置、是より例年御難澁之中ながら思召有之ての義ニゟ得共、昨今兩年分都合八百石有之ゟ、右之御米三代官ゟ無利足ニて拜借致し、右代銀融通講とも九拾貫目餘ヲ、先納銀五百貫目、先〻納銀百五拾貫目、都合七百貫目、右ゟ割付貸シ付ケ可申、當御趣法通り口達之趣、書面ニ認メ相渡しゟ間、村〻ニ而寫取、銀主共ゟ申譯可致、尤右四百石ツヽ是より每年御かし講銀も同樣御入用之節ハ、何時ニ而も可致返納、右貸付之利足ニ而七百貫目之元濟可致ゟ間、融通講ハ追〻幾遍ニても新講被仰付ゟ間、其旨承知被呉ゟ樣、同日御本陣善右ヱ門方ニて御膳御酒被下ゟ上ニて、御代官ゟ段〻被仰付ゟ、然レ共御上ゟ出ゟ者、右四百石ツヽの利足斗ニて元銀者返上、融通講之利分ニ而自然ト受取申義者、是俗ニ言ふせどの土門ニ用ゆるの理と心得、郡中一同寄拔(マヽ)不致、追〻相談等も所〻ニ而有之、十月十八日次右ヱ門隱居與惣兵ヱ方ゟ被參源重郎傳左ヱ門抔申ゟ者、迚茂融通講追〻御組立先納銀受取ゟも我物ニて我かし受取申事ニゟ得者、先納銀永納致し格別之損失も有間敷、兼而願居ゟ濱御米之事願ゟハヽ如何哉與被申ゟ、乍併時節幸ニ當時五苗之譯合相立ゟやう隱居御働有之間敷哉與被申ゟ、生得我心ニ叶ふ事なれハ歡谷ニよいかなら、先日以來每〻鄉中會合の節も、郡中一同甚六ツかしく申出ゟ故、御上甚御當惑幸之時節也、もし五苗運ニかないゟハヽ、先祖ゟノ孝行、子孫ゟの面目、拙幸ニ御家老方を始御用人郡奉行元〻衆中迄兼而御□意に立入申ゟ得者、立會中一同承知ニゟハヽ、御上之義者乍不及可然取斗可申ゟ、當兩村より先納金永納致ゟハヽ、郡中一同之押へニも相成り、御家中方御知行扶持方迄近年御掲ケ米多、依之御家中も同樣不靜、郡中幷ニ御家中迄靜りゟハヽ、其功不少、左ゟハヽ、五苗年來之愁眉を開申事も有間敷義ニ而も無之、全躰前〻より五苗之譯合イ相定申度期心ニて、

永榮講抔催し置ゟ義ニて、當時金銀ノ御用も、軍中ニ而鑓先高名も同前之義、隨分可然ト答申ゟ得者、夫々寄會相催し、和光院ニ而同夜寄會相談ゟ定之上、然者御上表之義者、與惣兵ヱ相働被吳ゟ樣、南北一統被申ゟ故、翌十九日諸役人中ゟ相廻り可申旨ニ而、先郡御奉行小嶋市太夫殿ゟ參り、兼而差上置ゟ先納銀之義、両度嚴敷被仰渡ゟ趣、當兩村之義ハ村役幷ニ私共より御趣意之趣理解申聞ゟニ付、長百姓共一同會得仕居申ゟ得共、何分郡中一同ニ聞入不申、依之無據追訴連印之上、差上ゟ段甚以恐入奉存ゟ、然共御上御仁政之思召ニて御咎メも不爲仰付、剩へ御前思召御座ゟ而、直ニ被爲仰出、御圍被遊被置ゟ御大切之御用米拜借被爲仰付被下ゟ事、寔ニ冥加至極御仁政之程難有仕合恐入奉存ゟ、依之當兩村之義者、右先納銀乍恐永納仕度奉存ゟ、御取成を以、何卒御許容被成下ゟハヽ、難有仕合ニ奉存ゟ段申述ゟ得者、時節不相應之申分故、少と御不思議之躰ニ相見ゟ處、乍恐是と申も別之義ニ而も無座、當村之義者、乍恐五苗與申野姓御座ゟ、尤五苗之義者、往往昔より毎々軍役等も相勤、五苗一統之軍功も御座ゟ而、諸將方より給りゟ感狀等も只今ニ相殘少し所持仕ゟ、相殘ゟ少々の感狀知行證文等紛失仕ゟハヽ、最早何之存念も無御座ゟ得共、五苗之者共ハ何か與御用等も御座ゟハヽ、乍恐御用等も相勤度義を兼而心掛ケ罷有ゟ義ニ御座ゟ得者、靜謐之御世ニ御座ゟ得者、かやうの時節少々の御用金ニても永納仕ゟハヽ、乍恐郡中御取鎭メの基ニも相成り申間敷哉、郡中之氣受(マヽ)も可然ゟ間敷哉、御許容被成下、五苗之働ニも相成りゟハヽ、願望之心底乍恐かやう〳〵ニて御座ゟ、何卒宜敷御取斗奉願上ゟ、左も思召被下ゟハヽ、來ル廿二日三組會合ノ席江罷出、取斗イ方御座ゟト無憚所申上ゟ得者、隨分尤成申分、明後廿一日夕方ニ參り可被申ゟ、夫迄ニ考置可申ゟ與被仰下ゟ故、夫々坂部四郎右ヱ門殿ヱ參り、左之趣意荒增申述、是も御取持被下之思召故、其外御家老・御年寄方・郡御奉行・元〆衆迄同夜無意立入、如細之趣追々(行間)「石川加左ヱ門同道ニ而夜分參りゟ事も有之、桂榮次郎同道ニ而參りゟ事も有之」相願ゟ所、何方茂御受宜敷ゟ、且此邊ニ而少し入用等有之ゟ得共、小嶋氏御取斗被下永納濟ゟ後、右四拾貫目餘之利足銀外村幷ニ御下ケ被下、是にて入用澤山ニ有之ゟ、廿一日夕方小嶋市太夫殿ゟ罷出ゟ所、先日申被出ゟ願之筋隨分可然ゟ、尙亦三組會合之席ゟ被罷出ゟハヽ、隨分差心得一統靜りゟやう取斗ヒ心得有之度ゟ、且亦永納之義、迚茂之席ゟ桂吉之丞ニ拾九貫目・又桂榮次郎ニ四貫目御借用有之ゟ所、何連茂差引五ケ年御改先日被仰渡ゟ役物ニて、言ふも如何敷ゟ得とも、先納銀さへ是通殊ニ御借用之義ハ迚も例格も有之、年限ニ相成ゟとも御差引無覺束事ニゟ、兩人共御借用永納ゟハヽ、右兩人者前段之御取斗イ有之ゟやう取持度ゟ趣被仰下ゟ、奉畏其趣太助ゟ申談しゟ處、是又永々五苗之格式ニも相成事ニゟハヽ、隨分永納可致與吉之丞受合被申ゟニ付、夫より榮次郎ゟ被參、是又同樣被談ゟ所、隨分承知ニ而ハ有之ゟ得共、當座御借用殊ニ御封札(マヽ)質入ニ受取居ゟ故、乍憚少外御借用殊ニ是迄年數之御借用トハ譯合違

ゝ得共、一同御取立ニも預りゝ義、殊ニ此方も前段（別カ）與有之事ニゝハヽ、隨分差上可申、其段與惣兵ヱ可然御申入、可然取斗被吳ゝやう太助ゟ被申ゝ、且亦同日小嶋氏ゟ被仰ゝハ、今般もし五苗之譯合少しニ而も相立ゝハヽ、小百姓共嫉之を、自然又騒動抔致し可申哉、依之同役共内〻相談し申所、小百姓之内ニ世話やき與やら言ふ物有之よし、右之者共へ羽織ニ而も兎シゝハヽ、村方之取鎭メニも可相成哉與被仰聞ゝニ付、兼而ケ樣之筋合ハ勘辨も有之事ゆへ、早速答申やうハ、念佛講世話やきの義ハ兩村ニ十五人ツヽ御座ゝ而、三年目ニ相替りゝ故に、乍恐御上より羽織ニ而も蒙御免ゝ得者、無程村中一同ニ相成、是又後〻の難澁與奉存ゝ、此義者村方ニ而相考へ、品ニより其場所限ニも重而御願可申上ゝ、乍併村方小百姓共ハ、私共樣子宜敷事ハ兼而好申ゝ、夫レト申も、實ハ譜代之筋ニ而、自然與よしミ御座ゝ故、主家も宜敷義ハ皆〻歡申ゝゆへ、格別嫉申間敷與御斷申上ゝ、且亦思召も有之哉ニ付、五人組頭之義御尋、右組頭之義者、長百姓之組ハ長百姓ニ而仕、小百姓之組頭ハ小百姓ニ而仕來ゝ段申上ゝ得者、被仰ゝ者、小百姓ニ組頭爲持ゝ義者存も不寄、代〻爲持ゝ哉與御尋、小百姓ながら親組頭ニてゝ得者、其子共を直ニ組頭ニ仕ゝ與申上ゝ得者、夫レハ尙以存も不寄、組頭ハ長百姓可持事ニ、殊ニ小百姓ニ爲持ゝ得者とて、其方達立會呼定ノ上ニ而人からを見立可申付事ニ、其儘ニ而代〻もたせゝ而者、自然之時組頭家ト申ゝハヽ如何可被致哉、是ハ甚不心得之事ニゝ、能〻勘辨可有事（マヽ）レト大キニ御叱リ被下ゝ、例年相考ゝて後世迄も勘辨之上、取斗方可有事ゝ、清（マヽ）右ヱ門御考廿二日三組世話役村役會合、其席後直ニ小嶋氏へ參上、御借用之義御尋、兩人共永納仕度ゝ段申上ゝ得ハ、迚茂之席ニ存寄も有之ゝ間、桂吉之丞方ニも、又其外ニも、先年御用達其後御差引無之御手形可有之ゝ間、所持仕ゝ而も何之役ニも不相立、反古同樣之品〻是も一諸ニ差上ゝハヽ、獸數ニ入宜敷取斗ひ方有之ゝやう被仰下ゝニ付、吉之丞方ニ有之拾五貫目之古手形壹通、且又善右ヱ門方ニ有之拾壹貫目餘之古手形壹通、右四口目錄壹通ニ認差上申ゝ、扨又尙〻御家老より元〻方迄念（マヽ）御取成奉願、朝暮無怠相廻り、立會中ハ產神兩社ハ勿論ン、日〻金毘羅山ニ參詣、山城ハ朝夕之祈念神明之應護ト云、諸御役人之御取成與言ひ、御前向首尾合至極宜敷、御家中幷ニ御家人衆迄、保津五苗之義ハ往古より度〻之御用等ニ相立、由緒正敷者ニ而、于今忠貞有之抔與名〻數代戴錄をなから、近年之揚米さへ難澁抔と申段不相應なりと御沙汰ニ預り、五苗之面目無此上も事ニゝ、彌以伊勢大神宮・氏神兩社・金毘羅權現祈念無怠、折節十一月十九日御代官寺本六郎兵ヱ殿ゟ書狀到來、五苗名前幷令持高帳面ニ相認メ差出しゝやう申來ゝニ付、全躰是まで追〻人數相增内〻相願ゝニ付、無躰三拾人ニも致し内〻申込置ゝ得共、まだ此上少〻成共相增申度ニ付、折節與惣兵ヱ御用ニ付廻村其夜又、忠左ヱ門ヲ以て亦小嶋氏ニ相歎ゝ所、無據ゝハヽ、此上貳三人ハ不苦趣

被仰下ゟニ付、三拾四人ニ相成り、翌廿一日四ツ時、都合三拾九人共御役所ニ罷出ゟやう被仰付、則廿一日一同罷出ゟ所、御書面之通被爲仰付、年來之愁眉をひらき、年寄□ハはたこ町丸平ニ而支度、兼而用意致置ゟ品共を御城代・御家老方・御年寄方夫ゝ役人衆中ニ持參、御禮申上、其餘ノ衆中ハ、歡勇ンテ氏神兩社・金毘羅山ニ御千度いたし、龜山ニて御禮ニ相廻り、歸りゟ者と和光院ニて一時ニ相成り、か左ヱ門・要次郎貳つを以テ殘居ゟ五苗中ニ呼ニ廻り、和光院ニ集メ、上意趣申爲聞一同連印相濟ゟ、廿二日御家老方并ニ諸御役人衆中へ、內ゝニ而頼込ゟ御衆中へ前段之壹物持參仕、與惣兵ヱ相廻りゟ折節、筏公事ニ而桂（ママ）善（ママ）ヱ門并ニ石川善次在京、依而村上小右ヱ門・永井甚右ヱ門、右御受書揃參兩人之印形ニ參、廿三日則御受書桂傳左ヱ門御代官へ差上ル、寔ニ難有仕合神明之加護ニ非ずんバ、年來之願望成就シ愁眉を開かんや、彌神明ヲ尊崇之、農業を專らニ勤、餘力有之時者、尙武藝無怠、臨時之節者彌御用ニ相立可申事、爲後鑑之記之、

享和元辛酉年
冬十一月吉日

村上與惣兵ヱ　菅浦忠昭

本姓桂菅家也、故有て村上唱ふ、年漸天命を知り、去ル八月上旬ヨリ隱居願相叶、然レ共御用向ハ相勤、故有て與惣兵ヱ村上與唱ゟ得共、今ハ後悔也、本姓桂與名乘度ニ付、後ゝ願書差上ゟ節ハ、五苗一統連印ニ而も被成下ゟ樣相願ゟ處、一同隨分承知、此度之働ニよつて後世ニ而も村中一同より以連印相願上奥ゟ趣御承知故、是又爰ニ印ス、

三〇

乍恐奉願上ゟ口上之覺

一、當兩村先納銀之義、長百姓共ゟ上納仕置ゟ所、利足九朱ニ御下ケ被成下、元銀置居被爲仰付、村ゝ一同難澁差支等も有之ゟニ付、村ゝ申合御憐愍御扱之義、奉願上ゟ所、御大切之御用米拜借被爲仰付ゟ段、於當兩村ニ者、右御仁政之程、長百姓一同恐入難有奉存ゟ、依之乍憚（ママ）よ右先納銀永納仕度、此段奉願上ゟ、右之趣御許容被成下ゟハヽ、長百姓一同難有仕合ニ奉存ゟ、以上、

保津村庄屋　　傳左ヱ門　印
同　斷　次右ヱ門　印
同斷加役　勘右ヱ門　印
（享和元）
酉　十月　　庄屋嘉吉　印
同　斷　村上勝之進　印
寺本六郎兵ヱ殿　　長百姓惣代　太助　印
同　斷　茂助　印

精書和光院寶藏へ入

三一

覺

一、銀四拾壹貫七百六拾九匁五分四厘　兩保津村先納銀
右之通此度永納仕度ゟ以上

南保津村
長百姓惣代　太　助　印
同　庄屋　傳左ヱ門　判
同　断　次右ヱ門　判

北保津村
長百姓惣代　茂　助　判
同村庄屋加役　勘右ヱ門　判
享和元年　同村庄屋　嘉　吉　判
酉　十月　同　断　村上勝之進　判

三二

覺

一、銀　拾九貫目　桂　辨内
寛政十二年申年御證文を以奉差上ゟ
一、同　拾五貫四百七拾三匁壹分九厘　右同人
明和元申年　御證文を以奉差上ゟ
但し右ニ記ス古手形也
一、同　四貫目　桂　榮次郎
當三月御當借御封札奉差上ゟ　南保津村
一、同　拾壹貫九百七拾八匁三厘　善右ヱ門
明和元申年御證文を以　但し右ニ記古手形也
奉差上ゟ、親善吉名前
右之通　御用銀差上置ゟ分、此度御證文返上仕、永納仕度奉存
ゟ、御許容被成下ゟハヽ、難有仕合ニ奉存ゟ、以上、

南保津村
善右ヱ門　印
（享和元）　〃　桂榮次郎　印
酉　十月　桂　辨内　印
同村庄屋　奥印貳人共

三三

（包紙）「上　保津村」
乍恐言上之覺
一、御内〻當村長百姓共一統、共祖由緒之義被爲遊御尋、難有
仕合ニ奉存ゟ、
足利將軍家之御時、一統軍功御座ゟ而、管領細川武藏守高
國公より給感狀を、只今ニ所持仕罷在ゟ、且又同御代當國
之守護代伊勢因幡守殿より一統之軍功預御感ニ陣幕を給り
ゟ、則蝶之御紋ニ而御座ゟ、只今ニ所持仕ゟ、又同御代當
國之守護代内藤備前守國貞公より一統軍功御座ゟニ付感狀

を給り、只今ニ所持仕罷有ゟ、又慶長年中一統軍功茂御座ゟ得共、恐多奉存ゟ故、不申ゟ、

右享和元年酉十月

松原紀伊守様

郡御奉行ゟ御尋ニ付、

差上申ゟ下書

保津村惣中　村上勝之進　印

同　断　村上與惣兵ヱ　印

三四

（包紙）「證文壹通　小百姓一統

[　]林[　]之證文也」

差上申證文之事

今度從　御公儀様、山之土砂留メ之義、被爲仰付ゟニ付、御村方より御訴詔依有之、從御地頭様御見分之節、當時持主無之迚茂元名前有之ゟ場所之分者、村方願之通土砂留メ普請可致村出精ニ段、其節被爲仰付ゟニ付、當時御持主御座ゟ分者、御銘々御自分ニ被成土砂留、其餘之分ハ五苗衆中幷小百姓共罷出、土砂留メ成就、立木生立ゟ上者、歳々豐凶御勘考之上、御賣拂代銀村中上下一統ニ御割符可被成下段、御村方ゟ被仰付難有奉畏ゟ、以後御名前林場所替之義ハ是迄之通、且五名他國之御衆中御歸村之御方ハ勿論、被成御分家等御衆中有之ゟ節ハ、右之場所何方ニ而も立木伐拂、御見繕可被成御渡ゟ段、承知仕罷在ゟ上ハ、其期ニ至リ少シ茂差支之筋申間敷ゟ、右惣林之義ニ付違乱ケ間敷義少シ茂申出ゟ間敷ゟ、且又御名々様方御所持之分ハ勿論、惣御名前林ニ而も、以後心得違ニ而立入ゟもの御座ゟハヽ、山役米御除被下、山留メ被仰付可被下ゟ、立木爲生立之義故、其旨村中一統不殘畏被居ゟニ付、爲後日之證文奉差上置ゟ、依而如件、

小百姓一門惣代　西　喜　八

（以下略計十名署名）

文化七年

庚午　三月

御庄屋　桂傳左ヱ門殿

同　村上市之進殿

御會所御衆中

三五

（包紙）「文化七庚午年　小百姓共ニ遣ゟ惣山書付留書一通」

覺

今度從

御公儀様山々土砂留之義、被爲仰付ニ付、村方ゟ御訴詔申上、從御地頭様御見分之節、當村持主無之迚茂元名前之ゟ場所之分者、村方願之通土砂留普請可致村出情之段、其節被爲仰付ゟニ付、當時五苗中名前林之外、蹈鞴谷幷三野山口迄道を限、牛飼場ニ除之、以後五苗幷小百姓一同之致惣林ゟ、尤五苗中分家、亦者他國歸村之仁有之ゟハヽ、右惣山之内ニ而立木伐拂、勝手

成所ニ而地面斗相渡シ可申ハ、其旨可致承知ハ、勿論立木生立ハ上者、御米之豐凶相考、立木賣拂代銀上下家別ニ割渡シ遣し可申ハ、以後心得違ニ而名前林并惣林ニ立入ハ者有之ハハヽ、科料錢壹貫文取之、及三度ハハヽ、山留メ可申付事、猶後日至迄相違無之樣書附相渡處如件、

「三」(朱)

文化七庚午年四月　　庄屋　村上逸之進　印

小百姓一統ニ　　桂傳左エ門　印

三六

取　嬰　濟　狀

一、惣而八人之者、小百姓一統不和合ニ付、此度四ケ寺ゟ取嬰被下ハ得共、難相調、依之八人之者ゟ御上樣ニ愁訴仕ハ處、双方被召出、御理解被爲仰聞、右四ケ寺、猶又寺町茂平治ニ取嬰被仰付、和談相調、自今老若迄も前々之通、双方何之申分無之樣事濟いたしハ、依之五苗中ニ引合御高貳千石餘之內長方ニ無理ニ所望者致間敷ハ、尤も應□之上、入魂を以て讓受、帳替被致ハ樣申談ハ、勿論他所ニ拔高等之儀、一切被致間敷、村方ニ而持合有之ハ樣取嬰いたし、萬端事濟狀、爲後日依而如件、

文化十年　　文覺寺　印

酉　三月　　洞泉庵　印

養源寺　印

丹波国南桑田郡保津村五苗文書

福性寺　印

寺町茂平治　印

南保津村五苗中

右前分之通、小百姓中ニも相認差出申ハ、已上、

三七

(包紙)「上　石川草春譜代儀兵エ家建替證文」

差上申證文之御事

一、私儀者元來石川家譜代之者ニ而、石川草春出京之砌ゟ石川家本宅留主居仕勤來、并ニ藏林共只今ニ守り仕ハ、尤舊宅殊之外及破損取繕茂難出來、尤主家之義者其後代々豐前小倉ニ被相勤先年御登り之節、御當地ニ御立寄、其砌舊宅破損等御見受、夫ニ付桂與三兵エ殿御承知被下ハ通、右普請料此度被差登ハニ付、古形之通右以古木を建直し申度、此段舊地等預り主桂與三兵エ殿ニ御相談申上ハ所、御村方御評定之上、私願之通御聞屆ケ被成下、御支配御役所迄御願被下、難有奉存ハ、然ル上者、及後年如何躰之義御座ハとも、私居宅抔申ハ譯合毛頭無御座ハ、爲後證之書付奉差上ハ、以上、

本人　儀兵エ　印

文化拾年癸酉七月　　同株　新七　印

御役人衆中

御立會衆中

桂與三兵ヱ㊞

右儀兵ヱ書面之通相違無之、依而奥印如件、

三八

（表紙）「萬延二辛酉正月
五苗相續之ため萬榮講取究書
五苗」

定

一、此度五苗中長參之席ニ而取究ゟ萬榮講之規定、堅相守可申事、

一、人〻家業不可怠事、萬一不心得ニ而本業懈怠いたしゟ者有之ゟハゝ、其講中ゟ急度相諫いたし出精たるへき事、其上聞入無之ニおいてハ、他組ニも致示談、急度申渡へき事、

一、講中ニ悪妄をたくみ、或ハ人之中言を云、或者酒宴遊興ニふけり、諸人之妨ニ相成ゟもの有之ニおゐてハ、其講中ゟ可吟味ス、若他講ゟ其沙汰有之ゟハゝ、本人者不及申、三役之衆ニも越度たるへき妄、

一、其講中ニ而金子入用之節ハ、成丈其組ニ而可致融通、もし融通出來兼ゟハゝ、他講之金子可致借用、其砌ハ三役之加印ゟ而被立可申妄、

附り筋違ニ而金子借用、堅無用之事、

一、弓鐵炮稽古之儀者、御上様ゟ御免之上ニゟへハ、成丈出精いたし、萬一之御用ニ可立事勿論也、夫ニ妄よせ、稽古定日之外、猥ニ取扱且酒宴ケ間敷儀堅致間敷妄、

一、茶花謠圍碁其外諸遊稽古成丈心懸くへき事ニゟへとも、家業之妨ニ相成ゟ儀者、堅可爲無用、尤右稽古ニ事寄セ酒宴遊興無用之事、

一、嫁入聟取之節ハ、前〻之通親類讀ゟ之上、古例相守可申事、

一、講頭者年順を以可相勤、銀元ハ當時勝手宜敷人を相頼、世話方ハ其講中ニ而示談之上、都合よろしき人ニ相定可申妄、

一、融通銀借用之節、無高并五石已下之人ハ年二朱之利足相加へ、元銀多少ニよらす一ケ年ニ百匁ツゝ、急度返濟可申事ゟ、

右同斷持高五石以上之人ハ、銀高ニ應し、時之振合を以て年六朱之利足相加、急度返銀可申事、

且過分之借財ハ、時之見斗ニより銀高ニ應じ、半分ハ田畑爲賣拂、半分ハ年六朱之利足相加へ急度可爲勘定妄、

但し田畑之價者時之相場ニよりゟへハ、成丈ケ助成ニ成様賣捌可申妄、

但し田地賣拂之節、筋違へ取組致間敷事、自然相背儀有之ゟハゝ、五苗一統ゟ急度取斗り可致妄、

酉　正月

講頭　村上治右ヱ門㊞
銀元　桂傳左ヱ門㊞
世話方　村上清太夫㊞

（外八人講衆署）

〃

（外五組署）

（總人數六十一名）

毎月人〻出銀之定

一、拾匁ツツ　桂與三兵ヱ

一、九匁ツ、　桂　金　藏

一、八匁ツ、　桂傳左右ヱ門

一、七匁ツ、　桂　定　次　郎

一、六匁ツ、　桂甚五兵ヱ

（外署、計六名）

〃

一、五匁ツ、　（十　名　署）

一、四匁ツ、　（六　名　署）

一、三匁ツ、　（十三名署）

一、貳匁ツ、　（七　名　署）

一、壹匁ツ、　（十三名署）

外ニ

無　懸　（五　名　署）

三九

（包紙）「證書　一通」

證　書　之　事

丹波国南桑田郡保津村五苗文暈

近年來下方一統人氣惡敷、兎角五苗に對し拒障をくわたてゟ段、甚以心得違之次第ニゟ、右等ニ組いたしゟ而者、人情相立不申ゟニ付、永世無隔意、五苗中へ味方いたしゟ旨、連印を以證書被差入ゟ段、奇特之事ニゟ、然上ハ相互ニ實意を盡し相はごく美可申ゟ、爲後日之依證書如件、

文久元年酉歳　南北五苗惣代

六月三日　（署名切取了）

善次郎殿

（外宛名署計二十五名）

四〇

（包紙）「未進之儀村方ニかまひ不申ゟ事、古格之定書一通」

當村長百姓小百姓御年貢御未進之儀、田畑家質無之、あるひハ主人あるひハ屋敷主等も無之取立難成ゟとも、損毛之儀者、一切村方ニかまい不申ゟ間、向後役人中了簡次第たるへくゟ、以上、

申　十二月　會　所

四一

（包紙）「書付一通　保津村五苗へ」

差上申一札之妻

一、私弟與惣次郎に本家相讓り此度別家新に相建申ゐ處、建方通例與者違ゐに付、承御不審奉恐入ゐ、

一、小百姓一統居宅之儀者、前〻ゟ御村方御掟茂御座ゐ趣委細承知仕罷在ゐ、殊に板縁付并に瓦葺等仕間敷段、奉畏罷在ゐ、此度普請仕ゐ折節、葺草一切無御座ゐ處、幸に私賣買之杉皮御座ゐに付、夫故杉皮屋禰に仕ゐ迄之儀に御座ゐ、末〻に至りゐても、瓦抔乘申間敷ゐ、且又梁上壁下地延引仕罷在ゐ處、二階窓哉與承御不審、是亦奉恐入ゐ、早速取拂可申之處、御憐愍被下難有奉存ゐ、早速一樣に壁付少シ之窓茂明申間敷ゐ、萬一及難澁に他人に讓渡ゐ節者、御村方に御屆申上、御差圖を請可申ゐ、爲後日之一札如件、

家主　平　七　㊞
無念堂　太　平　次　㊞
西組　半　七　㊞

御會所

右拙者譜代平七書面之通相違無御座ゐ、依而奥印如件、

桂與惣右ヱ門　㊞

四二

乍恐謹而口上書之覺

一、保津山之儀往古ハ山役錢六拾貫文ツヽ指上ケ、山之立毛皆敷村まゝに働、身命を送り申ゐ御事、

一、八拾年斗以前迄ハ、米直段殊之外下直に御座ゐに付、權田小三郎御代に、山役壹貫文に付米壹石にて御納所申上ゐ樣に御訴詔申上ゐへハ、百姓中望之通、現米六拾石に被爲仰付、每年御納所申上ゐ所に、其以後連〻米高直に罷成、村中もの共迷惑仕ゐへ共、右之仕合に而御座ゐ故、每年人〻相應株役ヲ以割符仕、御納所申上ゐ御事、

一、惣山之內桃之尾と申而、御公儀樣之松山壹ケ所御座ゐ處に此山も下草ハ村中苅取ゐ得共、松葺ハ每年御公儀樣に御取被爲成ゐ處に、菅沼織部守樣御代に此山之松木不殘御切取被爲成ゐに付、村中御斷り申上ゐへハ、桃之尾山之儀ハ松葺に而取申ゐ共、松木切取申ゐ共、村中之かまひ有間敷由被仰ゐに付、不及是非ゐ處に、其以後惣山之松御切懸り被成ゐ故、以之外之儀、何とも迷惑仕、昔ゟ惣山之松木御公儀樣に御切取被成ためし無御座ゐ通、御郡奉行菅沼二郎左ヱ門殿・海北太郎右ヱ門殿迄段〻御訴詔申上ゐへハ、御聞屆被爲成、翌日に村中被召出、如先年之御赦免被爲成ゐ御事、

一、忠山公樣御拜領被爲成四年過、去ル夘之年より惣山之松御切取被爲成ゐに付、此段何とも迷惑に奉存ゐへ共、其外萬事誠に有かたき御仕置に而御座ゐ故、如何樣先年之御樣子御耳に奉立ゐハヽ、御赦免被爲成可被下と奉存、御代官殿迄ハ折〻御訴詔申上ゐへ共、其時分ハ山もあつくかせきも御座ゐ故、達而者不申上、彼是打過申ゐ處に、連〻以山うすく罷成、近年ハ各別あれ申に付、山之かせきヲ以身命を

送り可申様無御座、小百姓等かつめいニ及申ゟ、其上先年ハ田畑五反作り申小百姓、近年ハ漸〻貳反・三反ならてハ作り不申ゟ、彌〻草臥申ニ付、田畑之修理等も難成、山あせ申ニ隨ひ、地方之いたミ迄ニ罷成、惣百姓中何とも迷惑ニ奉存ゟ、乍恐村末代之儀ニ御座ゟ間、如先年之被爲仰付被下ゟハヽ、有かたく可奉存ゟ、

四三

保津村五姓心得條目

第一條

一、養嗣子並相續人ヲ貰請ント欲スル者ハ、親族中ヘ示談ヲ遂ケ、素性正シク候ハヽ、五苗取締ヘ談シ、取締ハ他人ヲ以テ素性篤ト聞合セ、筋目正キニ相違無之上ハ、差支ナキ旨ヲ回答スヘシ、回答ヲ受タル上契約ヲ爲スヘシ、但シ村内五苗中ヨリ取組ハ格別ノ事、

（付箋）「明治二十七年八月二十五日改正

但シ本條ノ手續ヲ經ズ相續シタル家名ハ、五苗組合ヲ除名シ子々孫々ニ至ルモ再加スルヲ赦サズ」

第二條

一、養嗣子幷相續人ヲ招取候ハヽ、直チニ親族ヘ披露致シ、其後長參ノ節、一統ヘ酒差出シ披露致スヘキ事、

第三條

一、嫁娶ハ筋目正シキ者ヲ娶ルヲ妻ト唱ヘ、筋目不正者ヲ娶ルヲ妾トス、

但筋目正シキ者ト雖モ、藝娼妓ヲ勤メ來ル者ハ妾トスヘシ、

第四條

一、妻招取候ハヽ、直ニ親類ヘ披露シ、其後酒三升ヲ極度トシ取締ヘ差出置、長參ノ席ニ於テ披露致ス可キ事、

（後筆）「但本文ノ手續キヲ爲サヽル者ハ妾ト見做スヘシ」

第五條

一、妾腹ノ男子、不得止家名相續致サセ候ハヽ、五苗長參並集會ノ節ハ、假令高年タリトモ一代限リ末座ニ着クヘシ、

但妾ト雖モ筋目正キ者ハ本文ノ限ニアラス、左筋目ノ正不正ヲ探知スルハ第一條ノ末文ニヨル、

第六條

一、私生ヲ入籍シタル庶子幷私生タル者ハ、假令如何ナル事情アリト雖モ家名相續不相成候ゟ、

第七條

一、養女ノ儀ハ成人ノ上實子ト婚姻、或ハ聟養子等可致儀ニ候得ハ、養子ニ準シ吟味可致事、

第八條

一、披露無之以前ノ母親ニ出生ノ男子ハ、長參ノ席ニ於テ酒差出シ披露致シ候上、五苗ノ列ニ加フヘキ事、

第九條

一、分家致シ候節ハ妻披露ノ條ニ準スヘシ、

第十條

一、博奕ノ場所等立寄申間敷、若五苗中ニ右等ノ風説有之ハヽ、取締ヨリ意見ヲ加ヘ可申事、

但現行相顯ルヽニ於テハ、時ノ談示ニヨリ一年以上三年以下絶交ニ可及事、

第十一條

一、盜名ヲ負ヒ候樣ノ所行有之候ハヽ前條但書ノ通處分可致事、

但輕重罪ニ係ル者ハ猶重キヲ以テ議スヘシ、

第十二條

一、五姓ハ從前侍分ト唱ヘ一村ニ長タリ、依テ平常農隙ニ於テ武藝ヲ練磨シ來リ候處、維新以後農間ニ武ヲ學フハ廢絶ノ體ト相成候、然ルニ人文漸次ニ進歩シ、小前末々ト雖學事ヲ知ル者モ有之、然レハ五苗タル者奮テ學事ニ勉强シ、村ニ長タルノ名ヲ空クスヘカラス、因テ滿十四歳以上ノ男子ハ他ノ學科ヲ修ムル者ハ格別、其他ハ豫テ設置之レ有ル三餘學舍ヘ入學シ、屹度勉學可致事、

第十三條

一、所有ノ地所賣却セント欲スル者ハ、親族中ヘ示談シ賣却可致、從前五苗外ヘ賣拂致ス間敷約束モ有之コトニ付、可成注意致事、

但、不得止事故アル時ハ五苗中ノ評決ヲ乞フヘシ、

第十四條

一、本邨ノ地所、他村並五苗外ニ所有ノ地所賣買ノ節ハ可成五苗中ヘ買取方ニ盡力可致事、

第十五條

一、淨瑠璃小歌ノ類ヲ稽古致間敷事、

第十六條

一、不品行ノ所行ニハ浸染シ易シ、右等ノ徒ニハ可成交際ヲ爲ス可ラス、若心得違ノ者有之トキハ、取締ヨリ屹度意見ヲ加ヘ可申事、

第十七條

一、衣食住ハ可成質素ヲ旨トシ、華族ノ擧動致ス間敷事、

第十八條

一、長參ハ申スニ及ハス、諸集會等ノ節、總テ年長ヲ以テ上座トシ、座次ヲ亂スヘカラス、

但時宜ニヨリ取締人上座スルハ此限ニアラス、

第十九條

一、明治十五年四月集會所建築致シ候上ハ、平常ハ三餘學舍ニ用ヒ、其外差支無之節ハ、五苗ノ內ハ一己私用ニ貸渡ス事モアルヘシ、

但、右借受ケントスル者ハ取締ノ承諾ヲ請フ可シ、

第二十條

一、通常會ハ每年一月ニ於テ開ク、

第二十一條

一、五苗集會ノ節ハ取締ヨリ報告シタル時刻ヲ違ハスヘカラス、且又出席ハ戸主タルヘシ、無據差支有之出席難致節ハ必斷リ置、翌日取締ヘ承リ合ス可キ事、

但、父兄及廿歳以上ノ嗣子ハ代人タルヲ得、

第二十二條

一、集會ノ節ハ都テ取締ノ制止ニ可隨事、

但其制止ニ服セサルトキハ、衆員ニ問テ決スヘシ、

（付箋）「集會之節罰則

一、無斷欠席　金貳拾錢

一、一時間以上ノ遲參　同　五錢

一、欠席シ翌朝取締ヘ聞合ヲ不參ス　同　拾錢

ル者

一、斷ハ報告時間迄ニ限リ時間ヲ後レ候ハヽ無斷ト

同樣之事

右之通示談之上決定ゐ事

明治十六朱年四月廿八日」

（付箋）「明治二十四年二月廿一日改正

集　會　罰　則

一、無斷欠席　金　五錢

一、一時間以上遲參　金　壹錢

一、斷續キ五度ニ及トキハ　金　五錢

一、以上ノ罰金ヲ出サザル者ハ翌年ノ四月三日參會ニ出席スル事ヲ得ズ、尤モ一家族中ノ事

右之通改正畢事」

第二十三條

一、取締二人ヲ撰擧シ任期二年トシ、毎年一人宛交代スヘキ事

但、撰擧ノ都合ニヨリ再任スルコトアルヘシ、

（付箋）「凡テ撰擧人同點ナルトキハ年長ノ者ヲ以テ當撰トスル者トス

右之通リ明治三十一年二月一日通常會ニ於テ決定追加ス」

第二十四條

一、取締ハ年俸ヲ給ス、其額ハ毎年一月通常會ニ於テ決スル者トス、

第二十五條

一、五苗共有財産ノ勘定立會人三名ヲ撰擧シ、年々改撰可致事

但、再撰ハ第廿三條ノ但書ニ同シ、

第二十六條

一、代替リノ節ハ前條承諾ノ上加名可致事、

右條々一統示談確定致ゐ、然ル上ハ互ニ違背有之間敷、依而連印如件、

明治十六年二月十三日

（署名畧）

（計六十四名）

（以後明治二十五年まで代替相續の者二十一名）

（明治廿二年分家調印者六名）